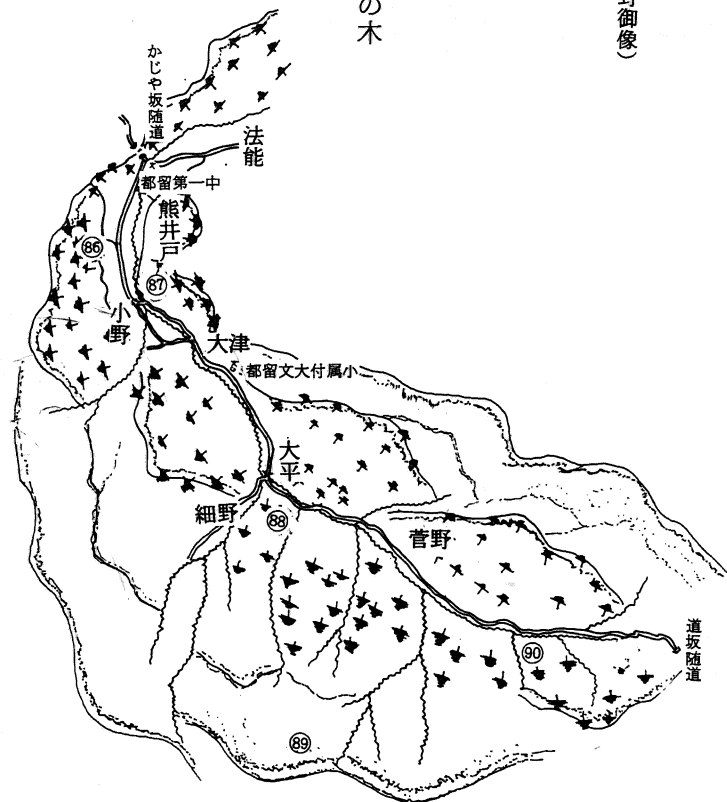


# 開地地区

- 86. 小野熊野神社 (小野御像)
- 87. 真福寺 (大カヤ)
- 88. 三輪神社
- 89. 御正体山
- 90. 養蚕神社とカツラの木



## 86. 小野熊野神社

神社は、小野地区権現原の丘陵にある。大同二年（八〇七）の創立といわれ、祭神は小野六社、熊野三社の九社が合祀されている。小山田信有の文書に保ノ尾総社権現とあり、ふるくは、保ノ尾郷（法能・熊井戸・小野・菅野・細野）全体の産土神であったが、今は、小野・熊井戸の産土神として、九月九日に祭礼が行なわれている。



小野熊野神社社殿

### 小野御像

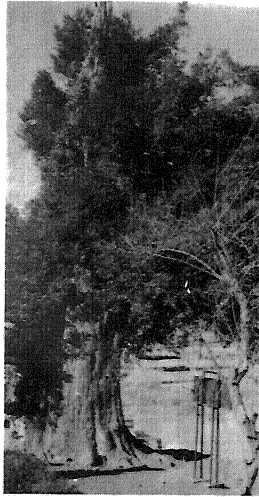
御神体のうち、小野御像といわれている像は、言い伝えによると、南朝の遺臣小野十郎正武を祀ったものといわれ、応永一〇年（一四〇三）富士谷の役に南朝軍が敗れ、宇津保宮伊良親王を擁して御祖代山（御正体山）に潜住したと伝えられ、今も、宮沢・宮殿・宮原の地名が残っている。応永三一年（一四二四）宮が信濃国伊那で戦場の露と消えたことを聞き、正武は田原の「窪田」で自刃し殉死したと伝えられている。



小野熊野神社参道

## 87. 真福寺

曹洞宗金沢山真福寺といい、本尊は十一面観世音菩薩で、宝鏡寺三世天融義通和尚によって天文四年（一五三五）開山された。寺はもと対岸の中小野にあったが、水害のため流され現在地（下小野）に移った。



真福寺の大カヤ

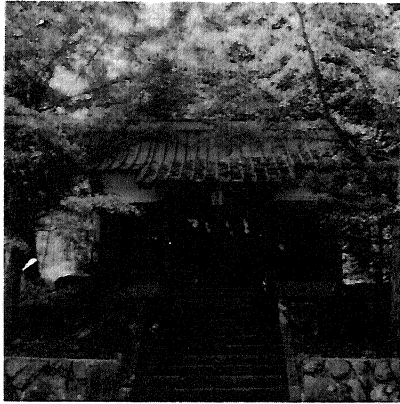
### カヤの木

寺の石段を登りきった所に梶下随一のカヤの木がある。カヤの実は美味で十二指腸虫駆除に効き、幹はむかしから、建築材、碁盤に用いられている。目通し幹囲六メートル、根廻り七・八メートル、樹高一六・三メートルの大木で、昭和三年六月一九日県天然記念物に指定された。

## 88. 三輪神社

大野栃苗代の県道右側の石段を登った古木の茂った中に社殿がある。大同二年（八〇七）小野熊野神社と同時代の創立といわれている。現在の社殿は文化年間（一八〇四〜一七）に再建されたもので、菅野・細野・栃苗代三地区の氏神として、三つの輪が栄えるようにという願いがこめられている。

祭神は大國主命で祭礼は九月一〇日に行なわれている。神社は御正体山の登り口にあたり、道しるべ、神



三輪神社社殿

燈が建てられ、むかしの面影を残している。明治二一年境内にあった御帳屋で政伝学校が開設された。

## 89. 御正体山と妙心上人

みしょうたい

みょうしん

### 御正体山

都留市の南東に位置し、標高一六八二メートルで、西の三ツ峠に次ぐ市第二の高山である。

かつて修験者の道場として知られたこの山の山頂は南都留郡道志村と本市開地・東桂とにまたがり、峻険な起伏の大きい尾根あり深い谷ありで、ツガ・モミ・ミズナラ・ブナ・松・杉などの樹木うっそうと繁り、まさに深山幽谷の表現に適し、信仰の山であった趣を呈している。



御正体山登山口（菅野）

地相は壮年期であり、関東山地御坂層の地質に属する。岩層は、下部は緑泥石片岩、千枚岩、黒雲母片岩、ホルンフェルスなどの変成岩と凝灰岩凝灰角れき岩、けい質泥岩などが主で、麓一帯に広く分布し、上部はけい質泥岩、けい質凝灰岩、火山れき凝灰岩などが山

頂を占めている。

この山に権現社を祀るようになったのは、遠く、弘仁期（八一〇〜八二二）に伊弉那岐命を勧請したのがはじまりと伝えられているが、文献上は、宝曆一三年（一七六三）の絵図の山頂に御正体権現神社が描かれているのでそれ以前にさかのぼれよう。信仰の山として有名になったのは、妙心上人の入山が大きな役割を果たしている。

文化一〇年（一八一三）全国を巡って荒行を積んだ妙心上人が入山して、「鹿留山三生体山」を開いて信者を広げた。

その後、二代妙善尼、三代巨戒上人が入山し、信仰を広めたが、修験宗廃止の官令により、信徒は追払われ急速に衰退していった。

ふもと細野地区では、古く「お刈り分け」の行事があった。実った麦が長雨で芽が出てくるほどになると困った農民たちはみのかさをつけ、手に手にカマを持って参道の草を刈り分けて山に登って行き、頂上で祭事を行い、天候の回復を願うと、下山する頃には不思議と雨があがったといわれている。

御正体山の登山口は、菅野、鹿留、道志の三道があるが参詣者は小野、鹿留の里宮に参拝した後登山した

ものである。殊に鹿留からの登山道は、古渡一本地蔵から三三観音が道案内として点在し、心を慰め疲れを癒やしてくれる。今は登山道としての道は荒れているが、日帰りコースとして最適な山である。

### 妙心上人

上人は、美濃国大野郡神原之庄（現在、岐阜県大野郡谷汲村宇神原）で、安永八年（一七七九）一月一日に生まれた。幼名を熊吉といい、九歳の春、聖護院宮内正行院の弟子となり、一四歳の時、家に帰り古野小市郎藤原吉忠と名乗った。間もなく両親を失い、また師に逝かれたので世の無常を感じ、故郷を離れ、全国の千嶺万岳をめぐり、千

辛万苦の荒行を続け、文化一〇年（一八一三）七月、御正体山に入山して「鹿留山三生体山」を開き、開地、谷村、鹿留、相模方面に信者を広げた。土地の人も、教化とともに修行にあけられる上人をお上人、お上人と呼んで尊敬した。

文化一二年（一八一五）三八歳



御正体山絵図（小野若宮神社所蔵）

の若さで、即身成仏となり、衆生の罪悪を身一つに受けようと発願し、わずかにソバがゆを食するのみの断食に近い座禅生活に入り、生きたままの姿で入寂、ミイラとなつて、死んだ後も教化の骸を留めた。このミイラは、中尊寺や羽黒山のミイラとともに自然的なもので全国でも有名である。

このミイラ（即身仏）は麓の上人堂に祀られた後、県病院に移管されたが、身元が判明して明治三年、生まれ故郷の横蔵寺に安置された。

## 90. 養蚕神社とカツラの木

菅野川上流の菅野地区の村はずれで、道志村道坂峠に通ずる登り口右側、旧道志街道左側にこんもりとした森がある。その森の中に養蚕神社がある。

社殿の後方左右に二本の「水の木」と称する大木がある。その大木は、根廻り約九メートルの桂の木で、一本は逆さ木で枝が垂れ下っている。

むかし、弘法大師がまだ修行僧として諸国を脚行し、道志村から谷村に下る途中、この桂の木の根元で休まれ、その桂の木の枝を折って箸をつくり食事をされた。やがて、食べ終った大師は、一本の箸を逆さに、一本の箸を正常に土にさし、「ふくべ」の水を注ぎ育てようとして修行の途につかれた。

やがて、成長した二本の桂の木を「水の木」と呼び「ふくべ」に汲んだ流水を「ふくべの水」と今も呼び伝えられている。

この「水の木」から一キロ奥に小種沢という沢がある。この沢の中復に小種岩と呼ぶ岩山がある。

この岩山に村の人々は養蚕の神を祀りお祭りを続けて来た。

ところがこのお宮は、地区から二キロもあり急な坂

道でお詣りも困難のため、明治四三年に村の総意によって、弘法大師の御徳と、水の木の由来を尊んで、二本の水の木の真中に養蚕神社の前宮「おしらがみさま」としてお祀りし現在に至っている。

祭神は、養蚕大明神で、祭礼は、四月二三日である。社殿は、一間社流造り、トタン葺で、拜殿は切妻造りトタン葺である。

この二本のカツラの木は昭和六一年九月二四日市の天然記念物に指定された。



養蚕神社社殿